

李氏朝鮮時代の書籍～早稲田大学図書館古典籍総合データベースから

リー・マージ・クリスティン（国際教養学部教授）

【はじめに】早稲田大学中央図書館には稀少な韓国古典籍のコレクションが収蔵されており、そのほとんどについて『古典籍総合データベース』に画像データが収蔵され、オンラインでアクセスし、閲覧することができる。これは全世界で宝物を共有しているようなものである。韓国の「国外所在文化財財団」の調査によれば、韓国古典籍の数量は、およそ 500 タイトルである（『日本早稲田大学図書館所蔵韓国典籍』2020 年 11 月刊）。その中から、本稿では「儒教のルネサンス期」と呼ばれる李氏朝鮮王朝の正祖時代（1777-1800）に関連する書籍を紹介したい。

【正祖とその治世】李氏朝鮮王朝は、1392 年から 1910 年まで、約 500 年に及ぶ。日本では室町時代から明治時代にまで至る期間である。正祖は第 22 代の王であり、その在位期間は、日本では第 10 代将軍徳川家治から第 11 代徳川家斉の治世にあたる。家治が亡くなり、正祖 11 年（1787）、家斉が将軍に就任すると、徳川幕府は朝鮮に対して、将軍の代替わりに慣例として行われてきた朝鮮通信使の派遣・受け入れを、江戸ではなく対馬までとし、そこで国書の交換儀礼等を行いたい旨を伝えてきた（「易地聘礼」えきちへいれいと言う）—という出来事があった。

正祖在位期間中、18 世紀末の世界情勢を見てみると、1776 年、アメリカの独立宣言が採択され、フランスでは哲学者ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）が 1762 年、『社会契約論』を刊行し、人民主権による社会契約説を公表、1789 年には革命がおこり、ルイ 16 世やマリー・アントワネットがギロチンの露と消え、絶対君主制の終わりを迎えた。

李氏朝鮮の首都、漢城府では商業都市として近代化の動きがあった。すなわち正祖は、国家公認の商人に与えられていた権限（「禁乱塵権」非公認の店舗＝乱塵を取り締まる権限）を廃止し、小規模の商人たちも自由に商売ができるようにし、さらに税制の均等化をはじめ手工芸品の需要増加を図る施策をおこなった。

正祖は 11 歳の時、父である思悼世子が、英祖（1694-

1776）への臣下の讒言により、米櫃の中に入れられ餓死させられるという、残酷な処刑を目の当たりにしている。父の悲惨な死に対する復讐のため、正祖は暴君になる可能性もあったかもしれない。しかし、正祖は学問にうちこむことでトラウマを克服していった。そして父が王として実現できなかった儒教の徳治理念に基づいた経済政策等を実行していった。さらに正祖は統治者として、個人として「自我の存在」を把握することを心がけた。すなわち自分の内面的な心理を認知し、それに儒教の知識を加え、修身の道として「徳」の価値を追求した。この学究的な王は、祖父である英祖の著作、遺品を収集、保管するため、王立の図書館として 1776 年、「奎章閣」を建てた。これにより朝鮮王朝時代の貴重な典籍が現代に至るまで伝承されている。

【正祖時代の典籍】正祖時代の代表的な典籍は、3 つのテーマに分けられる。すなわち、(1)「儀軌」や「五服」、「五倫」等、儒教の「礼」理念と徳治に関するもの、(2)「大典通編」等の法典、(3)「擇里誌」等の地理書である。

【儀軌】朝鮮時代、王室における重要な行事や祭礼の場面を記録する「儀軌」と呼ばれる書が編纂された。「儀軌」は「儀式の軌範」を意味し、その内容は冠婚葬祭、弓撃ちや農民の儀式、宮殿の建造物、中国からの使節受け入れ等であり、絵画や図面を用いて記録されている。儀式に参加している人員の配備、その衣服、旗、小物等が、その規模と様子が一目でわかるように、詳細に描写されており、さらに物資の調達過程、参加者の給料等についても記されている。17 世紀から 18 世紀の宮廷儀式に関する重要な史料である。

王室の儀式や祭礼には、それに参加した農民や職人等の姿が描かれており、やがて彼らにより朝鮮社会各層にも「儀式の軌範」は型式化して受け入れられていった。

正祖時代に記された「儀軌」のうち、特筆すべきものは「園幸乙卯整理儀軌」であろう。正祖 19 年（1795）、正祖の母、恵慶宮洪氏（1735-1816）の還暦記念のため、華城に向かう行幸と祝宴の記録は、金属活字（整理字）により初めて印刷された「儀軌」となった。

なお、彩色を施された「儀軌」は、美術的にも高く評価されている。特に結婚の儀式、行列の模様を記録した「嘉礼都監儀軌」の中で、「班次図」の優雅な描写は、モーツァルトのオペラ作品として名高い「フィガロの結婚」を彷彿とさせる。

一方、このような「儀軌」に記録されるような王室の華麗な儀礼に対しては、すでに15世紀において、政治家である申叔舟(1417-1475)が、その著書「**国朝五礼儀**」(中央図書館貴重書庫所蔵。請求記号 ワ3-6312。以下、書名に添えるカタカナと数字の表記は、当館の請求記号を示す)において、王室の冠婚葬祭に関わる浪費を防ぐ方策を述べている。

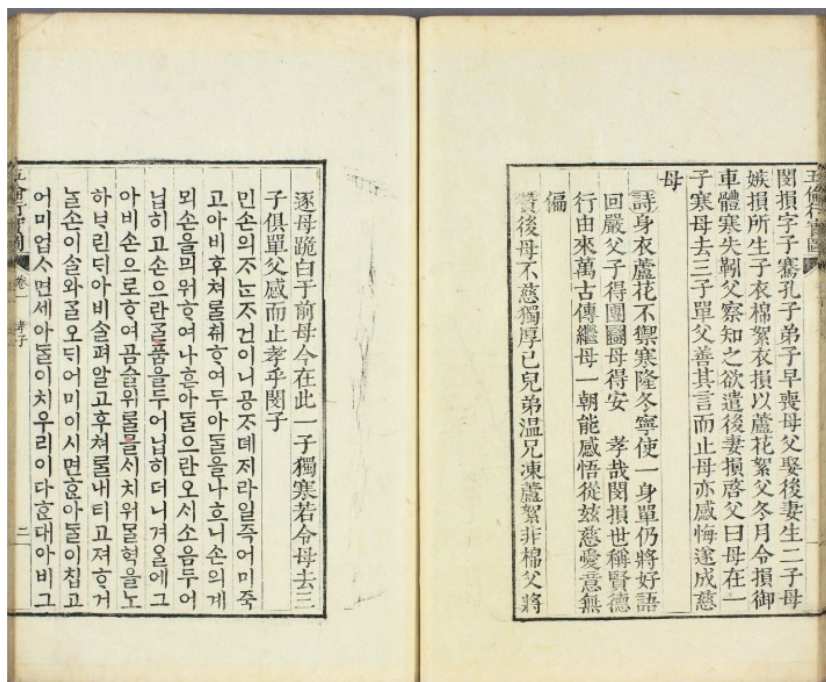
俞彦鏞(1714-1806)の著作、「**五服名義**」(貴重書庫所蔵。ロ12-2932)は、五つの喪服制度に関する、朝鮮と中国のそれぞれの模範と質疑応答により構成されている書籍である。ここにおける五服とは、「斬衰」(ざんさい。縁を縫っていない喪服)、「齊衰」(しさい。縁を縫っている喪服)、「大功」(たいこう。大まかに加工した喪服)、「小功」(しょうこう。細やかに加工した喪服)、「緦麻」(しま。粗い麻布の喪服)という喪服の等級のことであり、「斬衰」は父母の死後、三年間着用するものとされ、最も重要と考えられた。哀しみの表現にも儀礼があるのである。

李秉模(1742-1806)の著作である「**五倫行実図**」(貴重書庫所蔵。ロ9-1439、ロ9-2470)は、正祖の下命により編纂された、庶民を教化するための書籍である。親

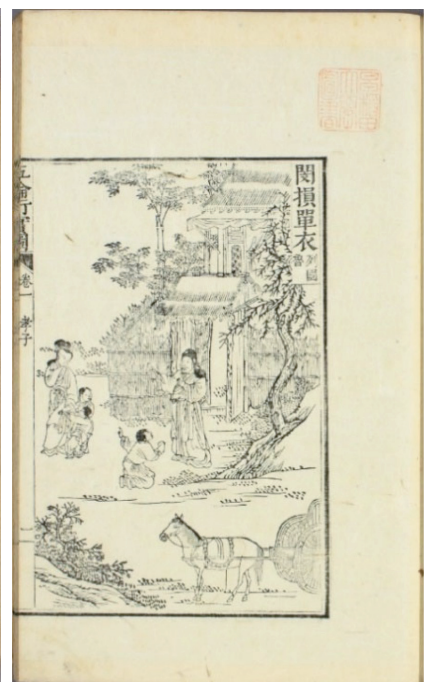
孝行や忠臣、貞節を守る婦人等、人が守るべき五つの徳目とそれを実践した模範とすべき人物150名の話について、まず第一に絵を、次に漢字本文、そしてハングル訳文を掲載するという構成になっている。絵は木版画で、漢字は金属活字、ハングルは木活字という手法で印刷されており、その印刷技術は高く評価されている。

ここで「五倫行実図」を開いてみることにしよう。巻第一孝行の第一話は、「論語」において、孔子が親孝行者と称賛した、孔門十哲の一人、閔子騫(名は損。536 BC-487 BC)の逸話である。継母は閔損をいじめ、真冬、連れ子には綿入れの服を着せてあげたのに、閔損には蘆の花を入れた服を着せた。そのいじめに気づいた父親が継母を離縁しようとしたが、閔損は「連れ子まで犠牲になってしまう」と継母をかばい、継母はその行いに感化され、心をいれかえたという故事である。

まず、家を追い出されようとする継母を前に、ひざまずいて父親を説得する閔損の姿が描かれている絵が掲げられ(図版1)、次に漢文本文、漢詩、ハングルにより、話が綴られている(図版2)。漢字に疎い人でも話を理解できるようにとハングル表記も掲載されているところが、正祖直々の啓蒙書たる由縁である。また絵を最初にもってきているところも、話に入りやすいようにした点であろう。話の内容もわかりやすい。この書籍には様々な工夫が施されている。



(図版 2)



(図版 1)

【法典】「大典通編」（貴重書庫所蔵。ワ 3-5099、6313）は、正祖 9 年（1785）、金魯鎮（1735-1788）等により編纂が成った。李氏朝鮮王朝の法典である。本書は「吏典」、「戸典」、「礼典」、「兵典」、「刑典」、「工典」の六典で構成されており、全 723 条の条文がある。「吏典」は中央・地方機関の統制、官吏の登用・免職について、「戸典」は国税、官吏の給与、物品販売、債務、相続について、「礼典」は科举官吏登用試験の施行規則、冠婚葬祭、外交について、「兵典」は軍事情報、徴兵制、常備軍について、「刑典」は刑罰と裁判について、「工典」は道路交通、計量についての条文が収められている。

「大典通編」は、現代では法哲学や法学史の研究において貴重な史料である。その最も核心的な概念は「礼」である。法史学の研究において、「儒教立憲主義」は、近代西洋の立憲主義と比較できる理論とされている。それは「礼治」と「徳治」を、政治をおこなう上で実現すべき理念としている。

ところで、「徳治」を実現させるためには世襲権力に対し、支配の牽制が必要条件である。尹宣挙（1607-1664）は、「家礼源流」（貴重書庫所蔵。ロ 12-1171）において、絶対君主による権力支配の牽制を説いている。また王者自らの徳治を実現するためには、王者による学問の理解が要求されると説く。この書籍が掲げる「家礼」とは、儒学の三礼經典と呼ばれる「周礼」、「儀礼」、「礼記」のことであり、中央集権体制として理想的な行政組織を作り上げることが主張されている。

【地理書】李重煥（1690-1756）が著した「擇里誌」（貴重書庫所蔵。ル 4-2488）は、一般大衆向けの風水の理論に基づいた人文地理書である。「四民総論」、「八道総論」、「卜居総論」、「叢論」の四部から成る。前近代の朝鮮社会の様々な社会階層を背景として、当時の八つの行政区域の歴史が記されている。すなわち、「卜居総論」においては、人が住みやすい場所として四つの必要条件、「地理」（風水の良い土地）、「生利」（生活基盤を維持できる経済）、「人心」（地域住民の人間性）、「山水の風景」（自然環境と人間の関係）について説かれている。また、各地域の特色が描写され、特に肥沃な土地の例として、全羅道の南原や慶尚道の晋州が挙げられている。さらに地域の特産品等も取り上げられており、当時の庶民経済の状況が記されている。

【その他の書籍】この他に、正祖時代に儒教のテキストとしてよく読まれた書籍を、古典籍総合データベースから挙げておく（所蔵はいずれも中央図書館貴重書庫）。

- ・李滉（1501-1570）著「退溪先生文集」（ヘ 16-2327）
- ・李珥（1536-1584）著「栗谷先生全書」（ヘ 16-2426）
- ・李瀾（1681-1763）著「星湖僊説」（イ 3-1489）

さらに李趾源（1737-1805）は、その著書「燕巖集」（ヘ 16-2404）において、十七世紀の朝鮮の農村経済の実態を記し、国内通商と対外貿易の発展を説き、清や西洋に学び経済の発展につとめようと主張する「利用厚生学派」を生み出した。なお、「燕巖集」に収載された「熱河日記」は、朴趾源が清国へ朝貢使節として派遣された際の見聞録である。小説文体により記されており、当時幅広い人気を博した。

【カフェで古典を】個人的には、中学生の夏休みの課題として読んだ韓国の古典籍が、早稲田大学中央図書館に収蔵されていることは、感無量である。特に「熱河日記」は、Waseda 125 カフェでスマートフォン片手にコーヒーを飲みながら吟味できる書籍である。早稲田大学図書館古典籍総合データベースを、多くのみなさまと共有できることを願う。

◇参考文献◇

- ・『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』東京 早稲田大学図書館 1991
- ・韓永愚著、岩方久彦訳『朝鮮王朝儀軌 儒教的国家儀礼の記録』東京 明石書店 2014
- ・『日本早稲田大学図書館所蔵韓国典籍』ソウル 国外所在文化財財団 2020
- ・Ginsburg, Tom “Confucian constitutionalism? The emergence of constitutional review in Korea and Taiwan” <https://home.uchicago.edu/~tginsburg/pdf/articles/ConfucianConstitutionalism.pdf> (last accessed on July 22, 2022)

本小論文の編集、刊行にあたってお世話になった早稲田大学中央図書館のローリー・ゲイ館長、特別資料室担当の高木理久夫氏に厚く御礼申し上げます。